

## 【二〇二一年度駒沢史学会大会・総会報告】

二〇二一（令和三）年度大会・総会が、左記の要領で開催された。本年度は、昨年度と同様に新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりオンライン形式が採用された。

大会 二〇二一年七月三日（土）午前一〇時より  
総会 午後一時より

### ◆研究発表

古代王権の神話と思想

―博士学位請求論文の概要報告

護持院隆光から見た徳川綱吉の御成

濱口雄幸の政治指導

―「議会中心主義」と社会政策審議会

ディール・エルⅡメディナ労働者共同体の配給と副業

アピス信仰と王権の正統性顕示

―サラピス神の創出に関する一考察

殷王朝滅亡の原因を探る

舟久保大輔氏

山田ちひろ氏

前川 友太氏

高野 弥生氏

小野 詠美氏

飯島 武次氏

### ◆記念講演

ユーラシア東部の香料交易とソグド商人

―法隆寺伝来の白檀をめぐる

大阪大学名誉教授 荒川 正晴氏

研究報告では、古代史一本、近世史一本、近現代史一本、西洋史二本、合計六本の報告が行われた。

記念講演では、大阪大学名誉教授の荒川正晴先生をお迎えし、「ユーラシア東部の香料交易とソグド商人―法隆寺伝来の白檀をめぐる」と題して講演いただいた。

ご講演では、ソグド人の紹介から始まり、中国への仏教伝来のはたした役割を示された。その上で、日本への仏教伝来と関わって、特に香料交易の重要性に着目され、法隆寺伝来の白檀の問題に迫られたものであった。ユーラシア東部の一部としての日本を考える大変壮大で興味深いご講演であった。

研究発表者ならびに講演をいただいた荒川先生には、心よりお礼申し上げる。

### ◆総会

毛利拓臣氏が議長に選出され、議事が進められた。

まず前年度活動報告として、（１）編集では、『駒沢史学』九五号と九六号の刊行が報告された。（２）会務では、二〇二〇年度の総会・大会の開催、三月に歴史学科との共催で卒業論文発表会が開催されたことが報告された（報告者六名）。

前年度決算報告と会計監査報告が行われ、承認された。

次に、本年度活動計画として、(1) 編集では『駒沢史学』九七・九八号の刊行、(2) 会務では総会及び大会の開催、卒業論文発表会の開催が提案され、それぞれ承認された。

最後に、役員の交代ならびに新規就任が発議され、いずれも承認された。会長は石井仁氏から小泉雅弘氏への交代、新規評議委員に新たに浅倉直美氏、新規評議委員及び委員に飯田洋介氏が選出され、承認された。

なお、大会の当日に示された報告要旨は、以下の通りである。

### 【報告要旨】

「古代王権の神話と思想——博士学位請求論文の概要報告——」

舟久保大輔

記・紀の神話は民間の中で伝承され、人々の生活を規定するようなものではない。記・紀の史料的特質から伺われるように、天皇の支配・王権の起源・正統性を語る王権神話である。ではそのような神話はどのような過程を経て成立し、各時代の王権にとってどのような意味を持ったのか。

本報告では以上の点について、王権の正統性の根幹を占める天孫降臨神話を素材に論じていく。

天孫降臨神話とは天上世界の最高神であるタカミムスヒやアマテラスが自身の子孫である皇孫を地上世界の統治者として天降ら

せるという神話であり、天皇はその最高神と系譜上繋がっている。つまり天孫降臨神話・王権の起源神話という性格を持っている。つまり天孫降臨神話は①王権の起源として天という世界が設定されている②天の支配者である最高神と皇孫・天皇が系譜上(血統上)繋がっている③皇孫が最高神の命を受けて地上世界の統治者として降臨するという点が本質である。しかし、記・紀では合わせて六の伝承が収録されているが、細部には異なる点が多い。特に最高神が所伝によってタカミムスヒとアマテラスで異なる点が重要である。これについてはタカミムスヒからアマテラスへ王権最高神が変更したとされている。つまり、天孫降臨神話は歴史的過程の中で成立したものである。天孫降臨神話が王権神話である以上、その成立過程も王権の成立・伸長過程の中で論じていく必要があろう。

本報告では以上の視点から王権神話の成立・その意義を論じることが、具体的には以下の点に着目する。第一に天孫降臨神話の本質部分はいつ・どのような背景で成立したかである。これは六世紀における世襲王権の成立と関わりがある。第二にタカミムスヒはどのような神であり、なぜ王権最高神となったかについてである。これは古代王権の穀霊信仰と関わりがある。第三に王権神話の最高神がタカミムスヒからアマテラスへ変更した時期・要因は何かである。これは持統朝とされるが、報告者は天武朝の政策と関わりがあると考ええる。第四にこのような神話は王権にとってどのような意義をもったかである。これについては、『風土記』に見える国譲り・天孫降臨神話に着目し、地方社会で王権神話がど

のように受容されたかという視点から考えていきたい。なお、本報告は今年に提出予定の博士学位請求論文の概要を報告するものである。本論文は二部構成としているが、ここでは第一部の内容を中心に報告するものである。

# 護持院隆光から見た徳川綱吉の御成

山田ちひろ

本報告では、徳川綱吉による江戸城内外への御成を俯瞰することで、御成先でどのような過程を経て側近衆やブレーンが形成されていたのかを明らかにする。徳川綱吉は養子であったため、御三家・御三卿に付けるような格の付家老が存在しなかった。そのため將軍就任後に側近を形成する必要が生じるのであるが、その側近衆形成の一端について、御成を切り口に検討するものである。そもそも「御成」とは、將軍が大名の邸宅を訪問することで、室町時代に形成された儀式であり、將軍と大名間の主従関係を強固にするために行われた。徳川綱吉の時代の御成は、綱吉が御成先で能に興じ、自身の趣味である儒教の講釈を行ったため、偏寵や趣味の追求が主であり、御成先の家臣に対して褒賞や加増が行われることからは、人材登用や人脈形成・強化の場でもあったと評価されている。

本報告では、「御成」の本来の意味である「その人の居所から他所へ出かける」という点に着目し、護持院隆光の日記である『隆光僧正日記』（永島福太郎・林亮勝校訂『隆光僧正日記全

三巻』（続群書類従完成会、一九六九～一九七〇年）から、徳川綱吉の江戸城内外への御成を抽出し、分析を行った。加えて、先行研究である「將軍家『御成』について（八）徳川將軍家の御成その三」（佐藤豊三『金鯢叢書第11輯』一九八四年）において作成された、「常憲院殿御実紀」からの徳川綱吉の御成先と比較することで、『隆光僧正日記』において記されていた御成は、幕府公式の行事ではなく、プライベートとしての意味が強いものが多く記されていることが明らかになった。その内、徳川綱吉が江戸城三の丸へ桂昌院に会いに御成をすることは、その回数の多さから従来の研究では「徳川綱吉が、桂昌院を軸として、將軍として守らなければならない範囲を越えていったことを実証するもの」と評価されていたが、徳川綱吉が桂昌院に会いに行くことで、綱吉に供をする者や桂昌院に会いにくる者などをはじめ、側近衆としての候補を江戸城三の丸に集めていたことを明らかにした。また、『隆光僧正日記』の著者である隆光も、最初は三の丸へ行くにも徳川綱吉の許可が必要であったが、綱吉の御成先に詰めるようになり綱吉の供をすることで、結果として桂昌院のケアを任されるまでに綱吉から信用されるようになった詰の変化についても時系列に沿って整理を行った。

## 濱口雄幸の政治指導―「議會中心主義」と社会政策審議會

前川 友太

本報告は、労働組合法の立案過程に注目することで、「議會中心主義」を志向したと指摘されてきた濱口雄幸の政治指導を再考する。これまで、濱口雄幸の政治指導をめぐる研究は、濱口が死の直前に書き記した回想録である『隨感録』や演説などに基つき、イギリス流の二大政党政治を理想としていたことが明らかにされた。とはいえ、あくまでもそれは濱口の政治的理想であり、事態に即した政治指導を明らかにしたとはいえない。また一方で、金解禁、立憲民政党内部の構造などを考察した研究によれば、濱口には卓越した「調整力」があったことが明らかにされている。一方で、植民地統治政策に注目し、濱口内閣の統合機能を明らかにした研究がある。今回、その研究を踏まえて本報告では、「議會中心主義」を志向した像や「調整力」があったとする像も濱口の一側面であることは認めるが、異なる濱口像を打ち出したい。それは、濱口が政党内閣の統治能力を証明するために、行政機構を有効に活用したという像である。

そこで本報告では、その濱口像を打ち出すために三つの点に注目する。一つ目は、政党内閣期になると、与党議員で審議会の委員を占める状況になった点である。本報告では、こうした状況を「審議会の政党化」と呼称する。二つ目は、濱口の立憲民政党総裁としての政治指導を明らかにする。一九二八年の初の男子普通選挙を田中義一内閣の与党である立憲政友会の選挙干渉を受けな

がらも、濱口率いる民政党は、政友会と僅か一議席差まで迫った。次期政権が近づくと、民政党は党組織を改組し、政策立案能力の向上を図った。そこで濱口が重用したのは、官僚出身者の議員である。重用により、政党の政策立案能力を向上させようとしたのであった。

三つ目は、本報告の核である労働組合法制定について、濱口内閣が社会政策審議會を設置した点である。一九二九年七月四日に組閣した濱口内閣は、約二週間後の七月一九日に三大審議會を設置した。いずれの審議會も、組閣後すぐに内閣が取り組むべき政策を出した十大政綱を実現するためであった。濱口内閣は、その政策の実現をしようと審議會を設置した。審議會を設置することで、行政機能を向上させる、いわゆる内閣機能強化によって労働組合法を制定しようとした。こうした内閣機能強化は、濱口が当時の政党政治を「試験時代」と認識していたことに起因する。

三点を明らかにすることで、濱口の政治指導の特質である行政機構の機能強化によって政党内閣の統治能力を証明しようと試みていた。だが、その政治指導は諸刃の剣であった。それは、政党にそもそも備わっていた統合能力を弱体化させるものであった。

ディール・エル・メディナ労働者共同体の配給と副業

高野 弥生

新王国時代のディール・エル・メディナでは、王墓建設に従事する人々が共同体を営んでいた。彼らは、労働の成果、つまり

王墓だけでなく、日常生活の中で必要な食物・衣服・家屋、そして労働の対価として受け取っていた配給、プライベートな手紙やメモなどの文字資料といった、壁画や彫像からは分かりえない古代エジプト人の実生活の一端を残している。なかでも、配給は異なる単語で記録され、デイル・エルメディナ労働者共同体において最も基本的な穀物配給である *d i w*、不足分を補う配給 *d n i*、食料や燃料を含む *H t r i*、そしてより不定期で特別な配給 *m k w* が存在した。しかし、*d i w* のみの配給量で十分に家族を養うことができたほど潤沢であったにも関わらず、共同体の人々は配給とは別の収入源を持っていたことが知られている。本報告では、労働者が仕事の対価として国から受けとっていた配給が具体的にどのようなものであったのか紹介し、さらに共同体の住人たちが個人間で行っていた経済的取引における収入と比較することで、経済的な観点から彼らがどのような生活を送っていたのか検討する。

まずはデイル・エルメディナ労働者共同体の基本的な情報や研究意義を明確にする。遺された文字資料を検討し、彼らがどのように暮らし、当時の社会階層のどのくらいの位置にいたのかという問題を研究することは、古代エジプト人の実生活や経済、社会構造をより具体的に明らかにするための一助となる。そして、副業とは労働者によって行なわれた経済活動であり、配給のみでは賄いきれない生活必需品を得る、または自身の財産を増やす目的があった点を確認する。つまり労働者への最も基本となる配給 *d i w* と副業で得られる収入を比較すると、*d i w* に対し

て割高な収入を得られる副業を行っていたことが明らかとなったからである。これにより、デイル・エルメディナにおける労働者たちの生活の中で副業が経済的に大きな存在感を持っていたと言える。

今日までの研究は断片的な史料の分類、そこに残された出来事の解釈など、個別的な研究が多く、デイル・エルメディナで暮らした人々の生活の全体像は未だ明らかではない。また、今後はすでに「やりつくされた」と言われる詳細な分析・研究をもとに、新王国時代の古代エジプト、あるいは古代エジプト全体史という、より大きな歴史的枠組みの中にデイル・エルメディナがどのように位置づけられるのかを考える必要性がある。

#### アピス信仰と王権の正統性顕示

##### — サラピス神の創出に関する一考察

小野 詠美

前三世紀、プトレマイオス朝エジプト（前三〇五〜前三〇年）の首都アレクサンドリアを中心に崇拜されたサラピス神は、同王朝初代ファラオであるプトレマイオス一世（在位…前三〇五〜前二八二年）によって創出されたと考えられている。メンフィスで崇拜されたオソルハピ（オシリス＝アピス）にギリシア的な容姿を付与されたことで誕生したこの神は、同王朝が滅亡した後ローマ世界において残存し、地中海沿岸地域を中心に拡大したことから、初の世界宗教ともいわれている。

しかしながら、この神が創出された目的については未だ明らかではない。現在の通説では、ギリシア人とエジプト人の融合ないしは国家統一を図ったものと説明されるが、プトレマイオス一世の治世において、両者の融和を望む傾向が存在したのかといった疑問や、エジプト国内に広く伝播した形跡が少ないことから、このような解釈は早い時期から批判されてきた。また、創出の目的に関する決定的な史料も発見されていない。ただしこの問題について先行研究がないわけではない。周藤芳幸氏は、サラピス神の創出に際しオソルハビが起源として選ばれた理由について、プトレマイオス一世とメンフィスの仲介役となっていたであろうメンフィスのギリシア系住民「ヘレノメンフィタイ」によるオソルハビ崇拜が関連していると考察している。そこで、本発表では、周藤氏の見解を手掛かりとし、サラピス神の起源となったオソルハビやそのルーツであるアピス信仰に注目することでサラピス神創出の目的について検討する。第一に、オソルハビがミイラとなりオシリス化したアピスと同一であること、またオソルハビというギリシア語の呼称を持つことを踏まえ、新王国時代以降のアピス信仰において、オシリスⅡアピスが重要視されていたこと、および末期王朝時代においては、王権の正統性を示す目的を持っていたことを確認する。第二に、サラピス神の創出者であるプトレマイオス一世が、王権の正統性を国内外に顕示することに重きを置いていた点を手掛かりとし、オソルハビが採用された理由を「王権の正統性顕示を目的としたアピス信仰の利用」であったのだとする。

その上で周藤氏の提唱した「メンフィスの仲介役としてのヘレノメンフィタイとの関連」と合わせ、サラピス神創出の目的は少なくともギリシア人を取り込もうとした単純な政治的動機ではなく、アピス信仰Ⅱ王朝時代の伝統を利用したものであったと提案する。

#### 殷王朝滅亡の原因を探る

飯島 武次

殷王朝最後の王である帝辛・紂およびその時代に関する『史記』の記述は、物語的であるが比較的詳しい。その概略は「帝辛・紂は、美女・妲己との愛におぼれ、賦税を重くし取り立て、鹿台に金銭を充たし、酒池肉林の遊びをした。帝辛は刑罰を重くし、炮烙の刑を設けた。帝辛に刃向かう者として西伯昌（後の周文王）を捕らえて羑里に幽閉した。西伯の臣らが、美女や珍奇な品々や良馬を帝辛に献上したので、帝辛は西伯を釈放した。西伯昌が死去し、西伯昌の子の武王が東征して河南の孟津まで進出した。八〇〇もの諸侯が殷に背き、周のもとに集まった。

周の武王は自らの戦車三〇〇輛、兵四八〇〇人を率いて帝辛の討伐に向かった。武王に従う諸侯の戦車四〇〇〇輛も加わった。帝辛も軍隊を繰り出し、牧野で防いだ。甲子の日に帝辛の兵は敗れ、帝辛は敗走して鹿台に上り、宝玉の衣を身につけて火中に身を投じて死んだ。周の武王は、黄鉞以て帝辛・紂の頭を斬り、これを白旗の先端にかけて衆に示し、妲己を殺した」である。約

五〇〇年間の長きにわたって続いた殷王朝滅亡の原因は、古来この帝辛の暴政と言われてきた。帝辛の壽陵と推定される埋葬の行われなかった方壙が、河南省安陽市殷墟遺跡の侯家莊西北岡に残っている。しかし、殷王朝滅亡の一つの原因は過剰な飲酒と異常な祭祀行為に有ったと思われる。殷の祭祀の場では、多くの奴隸や俘虜が犠牲として埋められ、甲骨文には、動物や人の犠牲に関わると推定される「伐」「牢」「用」「羌」の文字が多々見られる。殷墟遺跡の侯家莊西北岡では二二〇〇基を越える祭祀坑に多数の人身犠牲が埋められていた。犠牲には、牛や羊のほか、人間や軍隊・戦車も納められている。兵や武器を祭祀のために埋めたことが国力を衰えさせた可能性がある。殷人が酒を好み、国を傾けたと『尚書』酒誥や大盂鼎の銘文に書かれ、飲酒を諫める文章が見られる。殷代の大型墓・中型墓に副葬された青銅器は、実戦用の戈・鉞・鏃などの武器類を除くと、大多数が祭祀用の用具と酒器である。実用の農具や工具は極めて少ない。出土青銅器の構成が殷王朝社会の祭祀と飲酒に依存していたことを示している。殷王朝の日々は、想像を絶する人身儀礼と飲酒を伴う祭祀・占いが行われる世界だったのである。殷王朝の滅亡の直接の原因は、殷後期文化第四期に至つての度重なる遠征・戦争・反乱などが政権の弱体を招いたことにあるが、またあわせて祭祀と飲酒が殷王朝を滅ぼした要因の一つであった可能性も高い。